

タイトル	北海道「開拓」と地域社会の形成過程 - 越中獅子舞の伝承をもとに -
著者	内田, 和浩; UCHIDA, Kazuhiro
引用	開発論集(109): 49-69
発行日	2022-03-18

北海道「開拓」と地域社会の形成過程

——越中獅子舞の伝承をもとに——

内 田 和 浩*

1. はじめに

筆者は、15年程前に利尻島に行った際、ある集落で越中獅子舞が行われていることを知った。しかし、その獅子舞はその集落で行われているが、すでに入植者の母村であった富山県の集落では原型となった獅子舞は行われなくなっている、という話を聞いた。本研究の背景は、正にここにあった。

2019(令和元)年に「命名150年」を迎えた北海道には、富山県からの「開拓」移住者が多くⁱ、越中獅子舞を地域の伝統文化として継承している地域も多いⁱⁱ。その越中獅子舞が現在まで伝承されて来た経過には、移住者たちの望郷の思いはもちろん、形成された地域社会で寺社や学校・公民館、青年団等の活動による、地域社会教育実践の果たす役割が大きかったのではないかと考える。

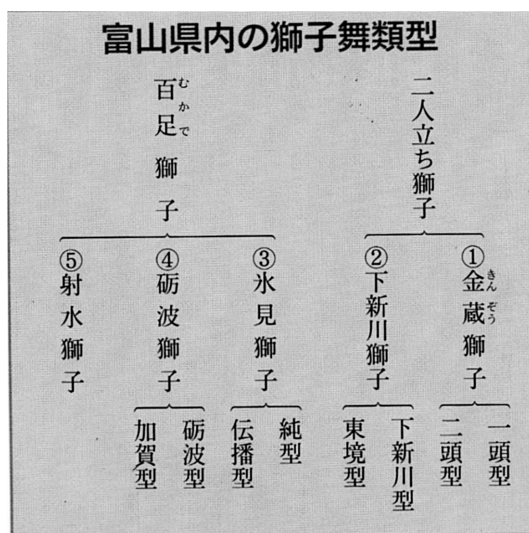
本研究は、開発研究所の2018年度～2020年度総合研究「地域資源開発の総合的研究——北海道の産業遺産、北海道の歴史遺産、北海道の文化遺産、北海道の自然遺産からの接近と再構築——」(研究代表・内田和浩経済学部教授)として筆者が取り組んだものである。まず1年目は、その実態把握として北海道内179市町村教育委員会への調査を行った(資料編に調査票と「3.伝承芸能について」のうち「富山県からの伝統芸能の継承」に関わる調査結果を掲載)。そして2年目は、その調査結果をもとに富山県(砺波市・氷見市・射水市・黒部市等)での資料収集を行い(資料編に富山県での収集資料として掲載)、現在まで富山県とつながりのある市町村の獅子舞を調査対象に絞ることに決めた。

富山県の獅子舞は、1300程あるといわれており、その特徴から以下の図1のとおり「砺波獅子」「氷見獅子」「射水獅子」(以上、百足獅子)、「金蔵獅子」「下新川獅子」(二人立ち獅子)に分類されているが、予備調査は百足獅子を継承し現在も母村と交流している市町村に絞り行うことにした。具体的には、天塩町(「射水獅子」射水市新湊地区と交流)・浦幌町(「氷見獅子」氷見市と交流)・音更町(「氷見獅子」砺波市高波地区と交流)・鷹栖町(「砺波獅子」砺波市苗加地区と交流)の4町に絞り、予備調査を実施した。

しかし、実際に獅子舞保存会等の代表者の方々からお話を伺うと、天塩町の天塩越中獅子舞

* (うちだ かずひろ) 北海学園大学開発研究所研究員、北海学園大学経済学部教授

図 1



出典：富山県教育委員会編『富山県の民俗芸能——富山県民俗芸能緊急調査報告書——』（2002年3月31日）

は、もともと1940(昭和15)年に厳島神社が改築造営され、1942(昭和17)年に行われた造営報告祭で郷愛会と富山県人会が獅子舞を奉納したのが始まりだった。当時の舞い手の中心が現・富山県射水市新湊地区放生津から来た人々で、その後1952(昭和27)年まではその人たちが毎年獅子舞を続けていたという。そして、1954(昭和29)年頃からは子どもたちが子供獅子舞を担うようになり、やがて創始者たちの孫たちが担い手の中心になったという。その後、富山出身者に限らず町全体で天塩町越中獅子舞保存会を立ち上げ、1987(昭和62)年頃に射水市新湊に習いに行き、役場の助成金等を受けながら、現在は大人だけの獅子舞として続けているということであった。したがって、現在交流がある射水市新湊地区は母村というわけではなかった。

浦幌町は、万年地区に入植した人々の多くが富山・石川の出身者で、地区内に八幡神社を分祠して1902(明治35)年の秋祭りに獅子舞を奉納するようになったという。当初は万年地区の人たちが中心であったが、万年地区の農家が減少し小学校が浦幌小学校に統合したり、八幡神社が浦幌神社に合祀されたりして行く中で、万年地区とは関係なく1957(昭和32)年に浦幌開拓獅子舞保存会を設立して、浦幌町全体の芸能文化として保護されるようになって行ったという。したがって、氷見市との交流は母村だから行われているわけではなかった。

鷹栖町は、北野地区に北野神社獅子舞があり、1898(明治31)年に富山県砺波市苗加地区から入植した人が母村から持ち込んだ獅子頭をもとに、北野神社に舞を奉納したのが始まりという。戦時中は中断していたが、その後1965(昭和40)年に北野神社獅子舞保存会が設立され、1978(昭和53)年に鷹栖町文化財第1号に指定された。しかし、平成に入り担い手が無く中断

するようになった。平成 20 年代（2008 年～）になって役場や農協、北野地区の住民たちが北野神社獅子舞保存会の再生に向けた話し合いを行い、新たに保存会を立ち上げ 2010（平成 22）年から北野神社例大祭で毎年 1 回演舞が行われているという。したがって、現在の担い手は北野地区の市街地の人々で砺波市苗加地区と関係がある人々ではなかった。

一方、音更町の東士狩地区は、現在も 20 戸が営農している農村地域（全体で 30 数戸）であり、地区内に東士狩小学校、東士狩神社等がある。1897（明治 30）年に富山県砺波市高波地区江波^{よなみ}からの集団入植（「江波団体」）によって開拓された地域である。獅子舞は、1902（明治 35）年に東士狩神社の春祭りに奉納され、以来春祭り・秋祭りに奉納されてきた。現在は秋祭りのみに行われ、1979（昭和 54）年からは東士狩獅子舞保存会として行っている。母村である砺波市高波地区江波の江波獅子舞保存会との交流も行われている。

したがって 3 年目は、現在も母村との交流が続いており、1 つの農村集落として獅子舞を継承している音更町東士狩地区に絞って本調査を行うこととした。

本研究では、明治期の北海道「開拓」期から今日まで、本州の母村からの集団移住によって形成された地域社会の形成過程を、越中獅子舞の伝承と継承の経緯とともに明らかにし、獅子舞の継承が地域社会にどのような影響を与えてきたのかを分析していくこととした。

しかし、コロナ渦で始まった 3 年目は、東士狩地区の皆さんに直接お会いしての聞き取り調査を充分行うことができず、文献調査のみの研究になってしまった。

本論文では、音更町東士狩地区の「開拓」期から現代までの歴史を、母村である富山県砺波市高波地区江波と音更町東士狩地区で収集した文献資料をもとに、獅子舞の伝承と継承の経緯とともに辿り、東士狩地区の地域社会の形成過程と今後の課題を明らかにしていきたい。

2. 富山県江波地区からの東士狩「開拓」と獅子舞

(1) 「江波団体」による集団移住

東士狩地区の母村である江波は、現在、富山県西部にある砺波市高波地区に位置する集落（ムラ）であり、『砺波市史』資料編 5・集落（砺波市、1996.3.25）には、「市域の北西部に位置する水田農村。戸出往来（主要地方道富山戸出小矢部線）が東西に通じ、ムラの東部で福岡往来（主要地方道福光福岡線）と交差する。氏神江波神社と眞行寺（真宗大谷派）が戸出往来中ほどの南側にあり、このあたりは街村状を呈してムラのセンター的位置を占めており旧役場のところからの道がとりつく。景観は散村であるが、西北部は家が少ない。このあたりは扇状地の末端で湧水があり、水田は湿田に移行する。東を山王川、西を岸渡川が北流する。東は北高木・荒屋、南は東宮森、西は小矢部市七社・五社、北は福岡町開辞・矢部に接する。常会は江波（九三戸）で一つ。」と記されている。

この江波から「江波団体」として、1897（明治 30）年に東士狩への集団入植が行われたわけであるが、その経緯について『砺波市史』（砺波市史編纂委員会、1965.3.20）には、「明治維

新をむかえるにあたってすでに多くの零細農民を擁し、さらに地租改正等にもとづく経済事情の変化、ことに明治14.5年より20年頃の不況の影響を受けて農村の分解がすすみ、多くの脱落農民を生みだした。これらの生活を失った人々の行先は、一つは大都市であり、一つは維新政府の北海道開拓政策に呼応する北海道への移住であった。不況のたびに一家をあげて村を離れ、北辺の地北海道へと移住するものが明治・大正期を通じて続々あらわれた。なかには村の戸数の三割近くが移住した場合もあるが、『北海道行き』と呼ばれるこの移住は、かならずしも名誉なことではなく、人目を忍んで行く場合が多かった。郷里に親せきを残して行った場合はまだしも、ほとんどは数年のうちで忘れ去られるか、あるいは昔語りとなるが多かった。」と記されている。

しかし、その中で「江波団体」の十勝への移住は、北海道庁が1906(明治39)年に作成した「北海道移住成功団体」に「成功した優秀開拓者団体」として紹介されている。1897(明治30)年の第1回の江波からの入植は23戸だったが、上記に記録は「総戸数42戸・所有地234町9反・馬441頭を有し、一ヵ年の収入は全戸が黒字であり、一ヵ年の収入が300円以上の戸数が22戸を数えるまでに発展していた。」と記されている。

(2) 東土狩神社の分祀と獅子舞

『音更町史』(音更町、1980年)と『音更百年史』(音更町、2006年)によれば、開拓2年後の1899(明治32)年4月に郷里の江波神社から祭神「月夜見命」を迎えて、東土狩神社を建立したとしている。しかし、母村である江波地区の西嶋栄夫が1985(昭和60)年1月に書いた『江波神社小誌』(砺波市立図書館所蔵)には、「東土狩神社には月夜見命(月読尊)を奉祀し

写真1



(江波神社 2020年2月筆者撮影)

ていると云うが、母村の江波村には月夜見命を祀った伝承も残っていない。どうした事なのか、不思議である。(中略) 真実は濃く厚いベールに包まれている。」と記している。

そして、東士狩神社では秋祭りが行われるようになったが、娛樂らしいものもなくさびしいので、郷里に伝承している獅子舞を奉納してはということになった。

実は、江波地区で獅子舞が初めて行われたのは、1887(明治20)年の夏であった。そのことを『江波神社小誌』には、「宗祖上人遠忌大法会が真行寺で勤修された。有志相集い大法会に興を添える為、法楽に躍動美溢れる氷見型獅子舞を高田島(現高岡市)より伝習することを一決した。熱心な練習の成果を法要会場で披露し、万雷の喝采を浴びた。この年の秋季例大祭に獅子舞を神前にて演舞し、織/流を寄進した。祭礼余興として奉納した最初の試みとなった。」と記している。その後、江波獅子方若連中ができ、現在まで江波神社の例祭に獅子舞が奉納され続けている。

つまり、江波神社で獅子舞が始まってわずか10年後に、東士狩への入植が始まったのであった。東士狩神社でも、幸いに郷里での獅子舞の中心メンバー3人が入植者におり、東士狩神社獅子方若連中組を結成して、郷里江波から道具・衣装を取り寄せ、1902(明治35)年4月17日の東士狩神社春祭りに初めて奉納されたのである。『砺波市史』資料編5・集落には、「明治35年 江波村の獅子舞を移住先の東士狩神社へ奉納する」と表記されている。以来、獅子舞奉納は第二次世界大戦の一時期中断したが、開拓50年を迎えた1946(昭和21)年には再開した。そして、1974(昭和49)年には東士狩獅子舞同志会、1979(昭和54)年からは地域住民の大半が会員として関わる東士狩獅子舞保存会を発足させ、郷土芸能の保存として現在まで110年以上続けられている。

写真2



(東士狩神社 2019年6月 筆者撮影)

そして、2009(平成 21)年 9 月には、江波獅子舞保存会のメンバー 9 人が東土狩神社の秋の祭典に来訪し、競演するとともに交流会を行った。そして、2015(平成 27)年 4 月には東土狩獅子舞保存会の 2 人が、江波地区を訪問し交流を続けている。

3、東土狩地区の地域社会の形成過程と獅子舞

それでは、2016(平成 28)年 4 月 10 日に開基 120 年記念式典を行った東土狩地区は、どのようにして「東土狩村」と明治維新政府によって行政区画が定められただけの「人口ゼロⁱⁱⁱ」の原野同様の地域を、現在のような地域社会へと形成していったのであろうか。

1897(明治 30)年に「江波団体」が「東土狩村」に集団入植した時、東土狩村に戸長役場の行政組織はなかった。その後、1901(明治 34)年に東土狩村、然別村、音更村の三村合わせて音更外二村戸長となった。そして、1906(明治 39)年 4 月 1 日に音更村が二級村となり、東土狩は音更村第 9 部となって、ここに東土狩村は発展的に解消したのである^{iv}。その後、1937(昭和 12)年には東土狩区となったが、大戦中は東土狩部落となり、1955(昭和 30)年に基礎自治体としての音更村の行政区として東土狩区となり現在に至っている^v。

その間の東土狩地区の人口・世帯数の推移を、収集した資料（『東土狩百年史』等）の記述から整理すると、以下の表ようになる。江波地区からの最初の団体入植は 23 戸であったが、その後の入植及び転入者は 31 戸あったという。しかし、「団体移住者 23 戸中、苦難を克服した戸数現在 8 戸に止まり、また明治 31 年以降入植及び転入者 31 戸中、現在戸数 8 戸に止まる^{vi}」とあるように、開拓当初の苦難の道のりは、今では想像できないほどの辛苦であったといえる。その苦難の道のりを克服しながら、東土狩地区は現在も 20 戸が営農する農村地区（全体で 30 数戸）として続いているのである^{vii}。

筆者は、現代社会における縮小する地域社会の持続可能な発展には、「我がまち」にではなくてはならない「モノ」があり、その「モノ」を地域住民がいかに維持していくのかを考え行動することの重要性を問うてきた^{viii}。

本論文では、そのことを逆に何も無い原野に集団入植した人々が新たに地域社会を形成する

東土狩地区の人口・世帯数の推移

	1897 年	1903.4 年頃	1917.8 年頃	1960 年 9 月末	1965 年 9 月末	1966 年	1970 年 9 月末	1975 年 9 月末	1980 年 9 月末	1995 年	2006 年
人口	不明	227 人	不明	240 人	244 人	191 人	237 人	217 人	244 人	294(122)人	不明
世帯数	23 戸	42 戸	40 戸	30 戸	39 戸	28 戸	38 戸	44 戸	57 戸	42(2)戸	37 戸
備考	入植時	①	①	②	②	①	②	②	②	()は晩成学園③	④

①開拓 70 周年記念誌『東土狩のあゆみ』（1966）

②東土狩開拓 85 周年記念誌『花さける郷』（1980 年）

③東土狩開基百年記念『東土狩百年史』（1996 年）

④東土狩開基百二十年記念『「東土狩百年史」以降これまでの歩み』（2016 年）

出典：資料をもとに筆者作成

プロセスに当てはめて、その「モノ」をいかに創り出して来たかという視点から、東士狩地区の地域社会の形成過程を概観していきたい。

もちろん、農村社会として成立していく上では、安定した「農業経営」という生活基盤と後継者が確保されていることが前提となる。そのことを最初に概観するとともに、ここでは、地域社会になくてはならない「モノ」として、「教育」「医療」「通信・金融」「商店」「住民自治の事務局」、そしてそれらをつなぐ役割として「拠点場所」「担い手」等を挙げてみて行きたい。

以下、『東士狩百年史』（2006年）（以下、「百年史」）から概観していく。

なお下の図2と図3は、「百年史」に掲載されている1950(昭和25)年当時と1996(平成8)年当時の東士狩地区の世帯状況図である。50年近くの歳月を経ており、世代も変り若干の離農も見られるが、ほぼ変わらぬ地域社会の様子を窺うことができる。

(1)「農業経営」の推移

開拓当初は、住居も「倒木にカヤを寄せて野宿し、掘っ立て小屋を作った」と記されているが、「内地で身につけたそれぞれの技術を生かして、掘っ立て小屋もより住み良さを求め」年々改造されていった。やがて開墾によって栽培された農作物は、「芋、豆、トウキビ、粟、稲黍（いなきび）、麦等、兎に角、食べられる物を作る事」であった。

しかし、翌年の1898(明治31)年には凶作で収穫はほとんど無かったという。同年9月上旬

図2

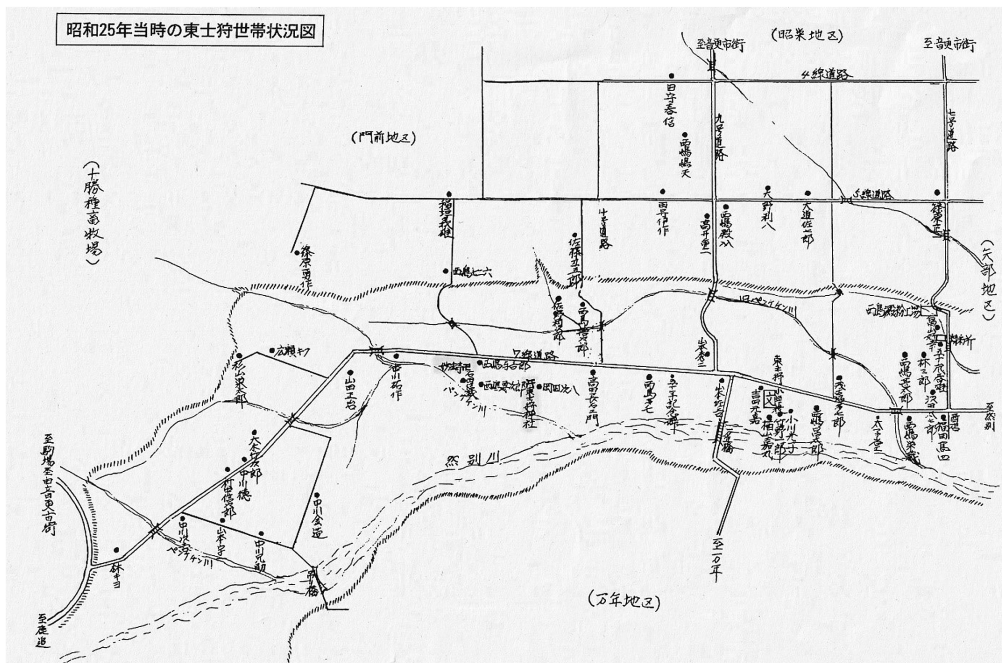
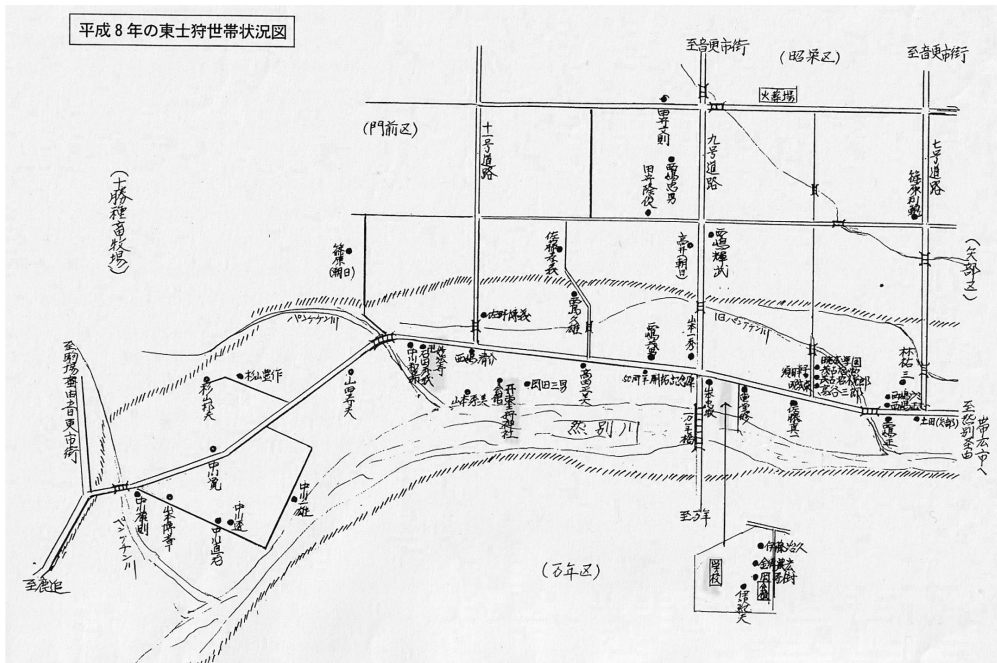


図 3



には大洪水が東士狩地区を襲った。「百年史」には、その被害の凄まじさが記されているが、「作物は水の引くのが早かった事、開墾地があまり無かった事で流失等被害については特に述べられていない」と記されている。

その後、「成功するための個々の努力とともに相互協力の必要も重視され」、1909(明治 42)年に東士狩信用購買販売組合を設立し、日常物資の調達、生産物の販売、金融関係等の内容を充実していった。これが、現在の JA おとふけ(音更町農業協同組合)へと発展していった。

大正時代には東士狩土功組合を設立し、米価が暴落したことで郷里・富山での米作体験とともに、畑を水田に替えようと国の補助金等を借りて田んぼの造成を行なった。しかし、土壌の水持ちが悪く生産量が上がらず、大きな負債を負うことになったのである。このことは、後に北海道庁も指導の甘さを認め、特別助成によって負債の整理を行い、再び畑に戻すことになり、「今日では、その跡形も無い位、整備された畑となっている」という。

昭和初期には、帯広に亜麻、甜菜工場ができ、共励会や品評会が盛んに開催されていく。さらに馬産改良も進み、十勝種馬所が出来て大繁盛だった。しかし、戦争が長期化していく中で、農耕馬まで軍馬として徴発され、さらに働き手も出征兵士として召集されていった。

戦前戦後を通じて、東士狩地区の土地条件は恵まれていたと言える。しかし、「然別川、パンケ、パンケの両河川が自然に任せた流れの為に度々の水害で土地や農作物が流され、いつも危険にさらされた状態」だった。そこで、その後改修工事が行われ現在は立派な畑地となっているが、それらを支えてきたのが、戦中戦後の部落会や農事組合であった。

戦後まもなく、東士狩地区では他の地区に先駆け、農村電化が始まった。1947(昭和 22)年には農業協同組合が設立され、農事実行組合の仕事も増えていった。1961(昭和 36)年の農業基本法公布以降、機械化農業が進み、各戸にトラクターが導入され機械の共同利用が進んでいった。東士狩地区でも、離農跡地を買い大規模経営が見られるようになっていった。

そして、1968(昭和 43)年、「それまで部落会の中で活動してきた実行組合を非農家戸数が増えてきた事から、東士狩農事組合として独立して設立」したのであり、その時組合員は 21 戸だった。東士狩農事組合は、全戸加入の音更町の行政区の 1 つである東士狩区とは分離して独立して設立した農業経営者のみの組織である。発足当時の組織は、組合長(西島久雄)の下、総務部・生産部・機械振興部・研修部が置かれ、収入源は農協からの組合活動費、事業分量割戻し金、肥料推進と日甜交付金等であった。1968(昭和 43)年の大きな取り組みとして、甜菜合理化事業として大型機械を購入し、甜菜生産組合を設立している。「百年史」には、1968(昭和 43)年から 1995(平成 7)年までの主な出来事が年次毎に記されている。

一方、1981(昭和 56)年から 1994(平成 6)年までの主要農産物の推移も掲載されている。ここから、東士狩地区では、小麦、甜菜、大豆、小豆、金時、手亡(しろいインゲン豆)、そして馬鈴薯等の畑作物が生産され、肉牛や酪農のためのデントコーンと牧草も多いことがわかる。東士狩での肉牛の導入は、1974(昭和 49)年からであった。十勝管内で初めて高等登録牛が誕生したのも東士狩からで、音更和牛の資質向上発展に寄与している。1995(平成 7)年には、飼養農家 5 戸飼養頭数 273 頭となっている。酪農は、大正初期にすでに乳牛の導入が数戸から始まっていたが、戦後徐々に飼養戸数も広がっていった。昭和 40 年代(1965 年～)には積極的に規模拡大への投資が行われ、昭和 50 年代(1975 年～)には大量生産の体制が整いつつあった。しかし、その後は牛乳・乳製品の輸入自由化等が進み打撃を受けていく。

このように概観したのみであるが、東士狩地区の農業経営は、開拓以来紆余曲折はあるものの、地域内の協同組織や共同活動を通して、着実に発展を遂げてきたと見ることができる。

(2) 「医療」「通信・金融」「商店」

「医療」では、東士狩地区には入植以来病院・医院が設置されたことがなく、音更町内近隣の病院・医院を利用していると思われる。

「通信・金融」では、入植直後の 1889(明治 32)年に西島要次郎宅に郵便留置所が設置されているが、1901(明治 34)年に音更郵便局ができており、その後西島宅にポストも設置され、はがき・切手などの販売の他たばこも販売されていたが、いつかは不明であるが廃止となっている。また、前述の 1909(明治 42)年に設立した東士狩信用購買販売組合では金融関係も扱っているが、現在は音更町内近隣の郵便局・銀行・農協を利用していると考えられる。

「商店」は、「百年史」の中で「開拓者達は、日常使用する品物の多くは自分達が持ってきた物で間に合わせていたが、長い生活の中で品物も不足」、「農業が軌道にのって来ると地域に日用雑貨を扱う店が必然的に開業し」たとしている。1907(明治 40)年頃には、東士狩地区内に

も米穀・日用雑貨を扱う商店が開業して、1916(大正4)年まで続いた。さらに1917(大正5)年からは別の日用雑貨の店が開店し、たばこも扱って繁盛したが、第二次大戦で商品不足となって閉店。1947(昭和22)年に、その店を譲り受けた人が洋服仕立て業と日用雑貨店として営業を始め、その後1965(昭和40)年には土屋商店となり、地区唯一の商店として営業が続いているという。しかし、近年では近隣の音更町木野地区に一大商業ゾーンが出来て、東士狩地区の住民の多くもそちらで買い物をすることが多いと思われる。

したがって、「医療」「通信・金融」「商店」は東士狩地区の農村生活の中では必ずしも「我がまち」直接になくてはならない「モノ」ではなく、現在では近隣（音更町の市街地）との交通ネットワークの中で「機能として」位置づいているといえる。

(3) 「教育」

学校では、現在の東士狩小学校の前進である東士狩簡易教育所が1901(明治34)年に開設している。そして、1903(明治36)年11月には校舎新築落成。1908(明治41)年には小学校6か年義務制となり、簡易教育所は教育所に昇格。1910(明治43)年に第5尋常小学校と改称。1914(大正3)年東士狩尋常小学校と改称して現在地に設置。1926(大正15)年に高等科が併置され東士狩尋常高等小学校と改称。1937(昭和12)年校舎総改築。1941(昭和16)年東士狩国民学校と改称。1947(昭和22)年新学制実施により東士狩小学校と改称し中学校併設。1951(昭和26)年東士狩小学校併設の中学校廃校。1958(昭和33)年東士狩小学校増築。1962(昭和37)年東士狩小学校体育館落成祝賀会。1969(昭和44)年東士狩小学校校舎落成・開校70周年記念祝賀会。1979(昭和54)年東士狩小学校開校80周年記念祝賀会。1982(昭和57)年高倉小学校を統合。1983(昭和58)年東士狩小学校体育館、特別教室改築、落成式祝賀会。1986(昭和61)年鎮練小学校を東士狩小学校に統合。1993(平成5)年東士狩小学校校舎新築、外講工事落成記念式典。2000(平成12)年東士狩小学校開校100周年記念式典。そして、2020(令和2)年は東士狩小学校開校120周年であった。

実は、東士狩地区の隣には、ほぼ同時期に入植した「矢部団体」(25戸)の矢部地区があり、東士狩簡易教育所の開設の前史として、1899(明治32)年に矢部地区で開設した寺子屋と1900(明治33)年に東士狩地区で開設した寺子屋があり、東士狩と矢部が合同して学校設立を願い出たことによって東士狩簡易教育所が認可されたのだった。

このように東士狩小学校は、入植の4年後から120年にわたって東士狩地区のみならず、矢部地区の住民の子弟教育や地域の活動にとってもなくてはならない「モノ」として、位置づいてきたのである。

獅子舞についても、1999(平成11)年には東士狩小学校で東士狩獅子舞保存会による児童への指導（東士狩獅子舞少年団演技指導）が行われている。

社会教育活動としては、青年団や婦人会が一般的に挙げられる。

東士狩地区でも、青年団は当初は「若連中」と称し、獅子舞も始めは東士狩神社獅子方若連

中組として活動していた。その後、1906(明治39)年には東士狩と矢部の青年を対象にした青年会「勇盛会」が組織されるとともに、現在の東士狩小学校に開設された第5農業補習学校が、尋常科卒業後の青年教育を担っていたという。1918(大正7)年には音更村青年団として一本化され、小学校区毎に分団も結成され、東士狩分団となった。活動として、研究発表会、弁論大会、陸上競技大会、武術大会等が開催されていたという。1931(昭和6)年には、東士狩に芝居の好きな人たちが集まり「ニコニコ会」が結成され、秋祭りの演芸会を開催していた。

戦後、1946(昭和21)年には音更村連合青年団が結成され、1948(昭和23)年に東士狩分団の西島多七が連合青年団長に選ばれ活躍している。しかし、その後音更村では農業改良事業を目指す青年活動として、4Hクラブや各種研究グループが村域全体に広まっていった。1950(昭和25)年には、農村青少年クラブ協議会が結成され、東士狩からも多くの人たちがリーダーとして活躍したという。その頃、「東士狩みのり会」が発足し、青年団と4Hクラブの活動を融合した活動を行っていった。やがて音更村連合青年団の組織再編が行われ、東士狩を含む西部連合青年団が組織された。一方、1959(昭和34)年には農業改良普及所が中心になって、4Hクラブが再び活動を始め、東士狩4Hクラブも会員15名で活動をしていた。やがて「高学歴社会となってきた昭和40年代には、義務教育終了後殆どの者が高校に進学するようになり、卒業後に地域に戻るのは農業後継者のみとなり、会員も減少し、特に女子会員に至ってはゼロに近い状態となり、次第に青年(男子会員*筆者注)を中心とした青年団活動へと変化していった。」と「百年史」には記されている。

しかし、「百年史」が刊行されたのが1996(平成8)年であり、その後の東士狩開基百二十年記念『「東士狩百年史」以降これまでの歩み』(2016年)には青年団についての記述はなく、この間に青年団は消滅したといえる。

一方婦人会は、1952(昭和27)年1月22日に東士狩婦人会として結成された。これは、行政区である東士狩区の新年宴会の中で提案され、実現したものだった。以来、研修会や講習会への参加や奉仕活動を行い、特に敬老会を主催して高齢者に喜ばれているという。こちらは、「百二十年記念誌」にも掲載されており、現在も活動を続けている。

(4)「拠点場所」

つなぐ役割としての「拠点場所」として、東士狩神社と妙法寺、そして東士狩集会所(現・東士狩百年記念館)が挙げられる。

東士狩神社は、1899(明治32)年4月に郷里の江波神社から祭神「月夜見命」を迎えて建立され、1902(明治35)年からは春祭りと秋祭りに獅子舞が奉納されているのは前述のとおりである。「東士狩を離れ、各地、各界で活躍する人達にとっても心の拠り所として、郷里の山河、古き学び舎と共に東士狩神社の神域は心の支えとなってきた」と記されているように、東士狩神社の存在は地域住民をつなぐ場でありつづけてきたのである。そして、1966(昭和41)年に開拓70周年記念事業の実施にあたり、東士狩神社を「郷社」と定めたのだった。「村社」では

なく、「郷社」としたのは、「開拓 70 周年記念事業に当り、無格社＝格の無い神社という意味にとられ紛らわしく適切でない、この際、村社に昇格の運動を起こそうということになった」が、東京の神社庁に出頭し村社昇格の陳情をしたところ、「社格は戦後廃止され、村社と称されることに制限はない」ことがわかり、氏子総会で協議の末、「村社より郷社の方がよからう」となったという。

また、東士狩集会所は 1932(昭和 7)年に東士狩神社境内に「江波団体」総代の一人だった故・柴田外次郎宅の用材寄付によって建築され、1995(平成 7)年まで「地域発展の基地として、あらゆる行事に活用されてきた」という。そして、その後は東士狩百年記念館がその役割を担っている。

一方、妙法寺は 1908(明治 41)年 5 月に富山県から移転してきた浄土真宗本願寺派の寺である。東士狩地区に定住した「江波団体」の中からも、一寺建立の気運が高まっていき、それをたまたま聞いた富山県の妙法寺坊守が本尊・阿弥陀如来と僧侶を伴って東士狩に妙法寺を移したのが始まりだった。東士狩地区の人々多くが門徒となり、1913 年に本堂が建立された。その後、1951(昭和 26)年には現在の新しい本堂が建立し、落慶法要には東士狩獅子舞も繰り出して、地区内はもとより町内外から 2 千人の人出があったという。その後も納骨堂・講堂の建設、本堂の改修、駐車場等の舗装などが行われ、1989(平成元)年には盛大な落成慶讃法要が行われている。それには「檀信徒と地区の方々から、目標を大きく上回る浄財が寄せられた」と記されている。

妙法寺では、様々な活動が行われて来ており、特に「仏教婦人会」は 1916(大正 5)年に発足しており、4, 50 人が参加する報恩講や研修旅行、奉仕活動等を活発に行った。1917(大正 6)年には「仏教青年会」も結成され、報恩講も行ったが 1966(昭和 41)年に解散した。その他、「こども会」(1975[昭和 50]年～)、聖歌隊「サンカーラ」(1981[昭和 56]年～)、「壮年会」(1982[昭和 57]年～)も結成されている。このように妙法寺も、東士狩地域の人々をつなぐ役割を担っていたのである。

(5) 「住民自治の事務局」

東士狩地区は、現在音更町の行政区の一つとして、東士狩区と名乗っているが、実態としては都市部の町内会・自治会に相当する地域自治組織である。農業従事者のみの組織である農事組合は、前述のとおり 1968(昭和 43)年に分離・独立して設立しており、東士狩区には地区に住む全ての世帯が加入している。

一方、1973(昭和 48)年には東士狩地区連絡協議会が作られた。これは当時の東士狩・矢部・朝日(1976[昭和 51]年東士狩と統合)の行政区を超えた連絡・協調を図るために結成した組織である。1980(昭和 55)年には、音更町の単独予算で東士狩会館(東士狩保育所を併設)が建設され、東士狩地区連絡協議会が管理運営している。さらに、ここに東士狩公民分館も置かれている。

したがって、東士狩地区連絡協議会は東士狩小学校と同様に、矢部地区と東士狩地区が一つの地域として一体であり、近年では東士狩地区単独ではなく、矢部地区と一体的な住民自治活動が進められているように見える。しかし、2つの地区のチームワークは認めたくて、「事実はずしもそうではない。それは、矢部・東士狩それぞれ一味違ったカラーを持っていることである。」と「百年史」には記されている。そして、「河川治水についても、(中略)東士狩は、矢部のそれとは比較にならない辛苦の連続であった。」とし、矢部地区と東士狩地区とは「共通の目的のために団結して今日に至ったと見るべき」と記してある。

(6) 東士狩の地域社会をつなぐ要としての獅子舞

実は、矢部地区の母村である現在の富山県西砺波郡福岡町矢部は、砺波市高波地区江波と接する隣の村であり、隣村同士が北海道の隣村に入植したという珍しいケースであった。そして、矢部地区にも矢部獅子舞保存会による矢部獅子舞があり、1904(明治37)年から地区の住吉神社の例祭に奉納され、現在も続いている。

筆者は、そこに東士狩地区の地域社会としてのアイデンティティを強く感じる。それは、なぜだろうか。

東士狩獅子舞の担い手は、当初は「江波団体」の中心人物たちであり、初代の「開拓」者たちであった。それが東士狩神社獅子方若連中組として、二代目、三代目へと引き継がれてきていたが、大戦による中断と高度経済成長の中で担い手が不足していった。そして、1974(昭和49)年に東士狩獅子舞同志会(1979[昭和54]年から東士狩獅子舞保存会)を結成した時、「江波団体」でない農家や非農家である東士狩地区住民の大半も関わる東士狩獅子舞保存会を発足させたのである。そして、1999(平成11)年には東士狩小学校での獅子舞指導による後継者養成を行い、2009(平成21)年は江波獅子舞保存会との訪問交流などを行っていった。それは東士狩地区として「江波団体」の歴史と伝統を引き継いでいこうという取り組みだったといえる。

写真3

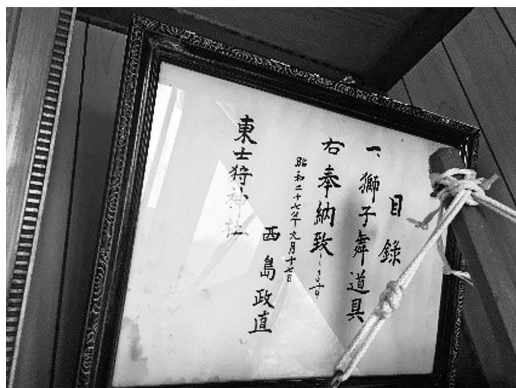


写真4



(東士狩神社 獅子道具と目録 2019年6月 筆者撮影)

つまり、開拓から120年以上経とうとも、その後の入植者や農業従事者でなくとも、東士狩地区に暮らす住民として、母村である「江波団体」の郷里江波地区への初代「開拓」者たちの思いや「開拓」の苦悩の歴史を後世に伝えていくため、東士狩獅子舞は毎年傳承されているのである。そして、代々の獅子舞の担い手たちが地域での「教育」を経て、「農業経営」「拠点場所」「住民自治の事務局」の中心的な「担い手」として東士狩地区の地域社会を形成してきたのであり、獅子舞の傳承は、地域社会をつなぐ要の役割を果たしてきているといえるだろう。

では、その「担い手」はどんな人々だったか？

「江波団体」の中心人物は、「西島」の名字を名乗る人が多い。団体長は、西島要次郎であった。「中川」「山本」「林」も、「江波団体」から現在に続く名字である。上記の東士狩神社と妙法寺を建立し、人々をつなぐ役割を担っていた「担い手」の中心は、まさに「江波団体」からの傳統を引きつぐ、これらの人々であった。そして、現在の東士狩地区も、それらの人々の子孫が非農家の住民たちと協力しながら、地域社会を維持・發展させているのである。

4、おわりに

2020(令和2)年9月17日、コロナ禍で危ぶまれたが、感染予防策をしっかりとることで開催された東士狩神社秋季祭典・獅子舞奉納を見学させていただいた。保存会の中川一雄会長を始め、担い手の皆さんが普段とは違う形で獅子舞を奉納する姿と、それを見つめる地域住民の皆さんの様子を見学させていただいた。子どもを抱いた母親が、「いつもは、子どもの頭を獅子に噛んでもらう」と話していた。コロナ禍で短時間の舞いとなったが、東士狩神社と東士狩

写真5



(東士狩獅子舞パンフレット、2017より)

写真 6



写真 7



(東士狩獅子舞 2020 年 9 月 筆者撮影)

獅子舞への地域住民の思いを窺い知ることができた。しかし、コロナ禍で当事者からの聞き取り調査がままならず、文献収集のみで総合研究の最終年度（2020 年度）が終わってしまった。そして、今年（2021 年度）もコロナ禍が続き、東士狩地区を訪ねて東士狩住民の皆さんから獅子舞への思いをお聞きすることができず残念でならない。

近年の全国的な少子高齢化の急激な進行は、これまで安定した農業経営と地域生活を行って来た東士狩地区においても、農業後継者不足や獅子舞の担い手不足を直撃している。2020(令和 2)年 9 月に訪問した際も、1999(平成 11)年に東士狩小学校で獅子舞指導を受けて現在担い手になった方が、30 歳代後半で一番若い担い手だと語っていた。それ以外は全員 5, 60 歳代で、最近新しい農業後継者がほとんどいないので、あと数年で百足獅子である獅子舞を踊る人がいなくなってしまうのではないかと聞いた。

東士狩地区が、今後とも持続可能な地域社会を継続していくためにも、東士狩獅子舞が今後も継続していくことを祈念したい。

参 考 文 献

- 『砺波市史』資料編 5・集落（砺波市 1996 年 3 月 25 日）
- 『砺波市史』（砺波市史編纂委員会、1965.3.20）
- 西嶋栄夫『江波神社小誌』（砺波市立図書館所蔵、1985 年 1 月）
- 『砺波にルーツを持つ人々～砺波から北海道へ～（展示図録）』（砺波市立砺波郷土資料館、2016 年）
- 『音更町史』（音更町、1980 年）
- 『音更百年史』（音更町、2006 年）
- 開拓 70 周年記念誌『東士狩のあゆみ』（1966）
- 東士狩開拓 85 周年記念誌『花さける郷』（1980 年）
- 東士狩開基百年記念『東士狩百年史』（1996 年）
- 東士狩開基百二十年記念『「東士狩百年史」以降これまでの歩み』（2016 年）

注

- i 例えば『新北海道史』第4巻には、p455に「表2 来住者府県別人口の順位」が掲載されているが、明治35～39年及び明治40～44年は富山県が1番であり、他の年次も概ね5位以内となっている。
- ii 例えば北海道では、富山県と香川県から獅子舞が多く伝承されており、富山県からは現在まで44件が伝わっているとされている。北海道教育委員会編『北海道の民俗芸能一覧』平成30年11月21日現在を参照。<http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/bnh/2018hokkaidonominzokugeinou.pdf>
- iii 開拓70周年記念誌『東士狩のあゆみ』（1966）を参照。
- iv 前掲 p28
- v 東士狩開拓85周年記念誌『花さける郷』（1980年）を参照。
- vi 開拓70周年記念誌『東士狩のあゆみ』 p12
- vii 東士狩地区には、1965(昭和40)年12月に設立した音更町立晩成学園という障がい者福祉施設があり、当初は通勤寮もあり職員の多くも東士狩地区に居住していた。現在は、社会福祉法人音更晩成園として、300人近くの利用者と100人を超える職員がいる（東士狩開基百二十年記念『「東士狩百年史」以降これまでの歩み』（2016年）より）。
- viii 拙著『参加による自治と創造 新・地域社会論』（日本経済評論社、2019）p56を参照。

資料編

平成 30 年 11 月吉日

各市町村教育委員会
教育長 様

北海学園大学開発研究所・総合研究（平成 30 年度～平成 32 年度）代表者
北海学園大学経済学部
教授 内田和浩

北海道の地域遺産に関する基礎調査

（ご協力のお願い）

皆様には、日ごろより地域の学校教育・社会教育・文化財保護等の充実・発展にご尽力のこと
存じ上げます。また、大学における教育・研究に対して、ご理解ご協力を賜り厚く御礼申し上げ
ます。

さて、このたび標記調査を北海道内 179 市町村教育委員会の教育長様全員にお願いすることと
なりました。ご公務ご多忙のところ誠に申し訳ありませんが、何卒ご協力くださいますようお願い
いたします。

なおこの調査は、北海学園大学開発研究所の総合研究（平成 30 年度～平成 32 年度）「地域資
源開発の総合的研究－北海道の産業遺産、北海道の歴史遺産、北海道の文化遺産、北海道の自然
遺産からの接近と再構築－」（代表・内田和浩経済学部教授）の共同研究の一環として実施する
もので、本総合研究の趣旨である「北海道の産業・歴史・文化・自然の各分野における先人たち
の遺産を再発見・再評価する」ための基礎調査（各市町村に存在する、又は所有・所蔵する地域
遺産の内容と有無を確認すること）として実施するものです。

したがって、このアンケート調査は、今後の本研究にとって大変重要且つ大切な研究資料とな
ります。つきましては、調査の趣旨をご理解いただき、ご協力を賜りますよう、心からお願い申
し上げる次第です。また本調査は、学校法人北海学園と北海道との包括連携協定（平成 25 年 8 月
22 日締結）に基づいて実施されています。

【記入上の注意】お答えは設問ごとに、○を付けたり、空白欄に記入したりしてください。ご不
明な点がありましたら、以下の【連絡先】へご連絡ください。

記入後は、調査票のみを返信用封筒に入れて 12 月 10 日までに投函ください。

【連絡先】北海学園大学経済学部 内田和浩
〒064-8605 札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 4 0 号
TEL 011-841-1161（内 2737）
E-mail ukazuhir@hgu.jp

調査票

I 基本事項

- 1、市町村名 ()
- 2、記入者 氏名 () 所属・職名 ()
- 連絡先 電話 () Eメール ()

*必要に応じて、後日各共同研究者より直接問合せがあります。よろしくお願いします。

II 調査項目

1、学校に関わる事項

- (1)現在の学校数 小学校 () 中学校 () 高等学校 ()
- (2)数が一番多かった時の学校数 小学校 () 中学校 () 高等学校 ()
- (3)うち廃校となった学校(建物)は、現在どうなっていますか? 個別にお答えください。
- (例) ○○小学校は、郷土資料館。△△中学校は、地区公民館 など *別紙への記入も可

- (4)現在ある小学校のうち、もっとも古い学校名と創立年月日はいつですか?
- 学校名() 創立(年 月 日)
- (5)上記の学校では、設立(1)00 年誌等が編纂されていますか? いる・いない

2、社会教育に関わる事項

- (1)現在、公民館はありますか? ある・ない (かつてあった・もともとない)
- (2)公民館の設置年月日はいつですか? (年 月 日)
- (3)公民館では、設立 50 年誌等が編纂されていますか? いる・いない
- (4)現在、図書館はありますか? ある・ない (かつてあった・もともとない)
- (5)図書館の設置年月日はいつですか? (年 月 日)
- (6)図書館では、設立 50 年誌や資料目録等が編纂されていますか? いる・いない
- (7)現在、博物館(郷土資料館を含む)はありますか?
- ある・ない (かつてあった・もともとない)
- (8)ある場合、その名称をお知らせください
- ()
- (9)博物館(郷土資料館を含む)の設置年月日はいつですか? (年 月 日)
- (10)博物館(郷土資料館を含む)では、設立 50 年誌や資料目録等が編纂されていますか?
- いる・いない
- (11)上記機関に学芸員は配置されていますか? いる場合何人ですか?
- いる (人)・いない

3、伝統芸能の伝承について

- (1)開拓の歴史の中で母村としての本州から伝わった伝統芸能（舞いや太鼓、お囃子等）が現代でも継承されていますか？ いる・いない（かつてあった・もともとない）
- (2)「いる」場合、その名称・種類・母村の地名（県・市町村）・伝承されている地区名をすべて記入してください。その際、学校や公民館がその活動拠点となっている場合は、その拠点施設名も記入してください。

例 ①、〇〇神楽(太鼓・囃子)〇〇県〇〇村、本町〇〇地区(〇〇公民館)

4、有形無形文化財について 国・道、市町村の有形無形文化財に指定されているもので、上記1～3の施設(学校・博物館等)や所蔵物、伝統芸能があればすべて記入してください。

例 旧・〇〇小学校校舎(町有形文化財) 〇〇神楽(道無形文化財)

5、貴自治体の公文書の保管について

- (1)行政文書の保管についてお聞きします。貴自治体では50年以上経過した公文書について現在も歴史的史料として保管されたものがありますか？ ある・ない
- (2)「ある」場合、保管されている行政文書のもっとも古いものは、いつごろのものですか？ (年頃)

6、産業遺産について

- (1)炭鉱や鉱山、鉄道、酒造業、開拓集落等の産業遺産(ある時代においてその地域に根付いていた産業の姿を伝える遺物、遺構、遺跡である)は、ありますか？ ある・ない
- (2)「ある」場合、その名称・種類をすべて記入してください。

例 〇〇炭鉱跡 〇〇鉄道跡

*貴自治体等のホームページに掲載がある場合、そのアドレスを記入されても結構です。

ご協力ありがとうございました。

記入後は、調査票のみを返信用封筒に入れて 12月10日までに投函ください。

富山県から伝統芸能を継承している市町村（「3、伝統芸能の伝承について」をもとに作成）

- 日高町 ①獅子舞：富山県小矢部市、門別本町（門別公民館）。
- 岩身沢市 ①岩見沢雅楽会、富山県、福井県、在活動休止中。
②砺波獅子舞、富山県、現在活動中止中。
- 美唄市 ①峰延獅子舞：美唄市峰延町峰権 2 区（峰延獅子舞保存会）
②峰延東傘踊り：美唄市峰延町公園（峰延東傘踊り保存会）
- 芦別市 ①芦別獅子：芦別獅子保存会、富山県南砺市城端町の西明獅子を祖型とする百足獅子舞
- 赤平市 ①赤平住吉獅子舞（獅子舞）富山県氷見地方、赤平市住吉町（住吉獅子会館）
- 上砂川町 ①上砂川獅子神楽（太鼓・囃子）富山県富山市、中央地区町民集会所
- 長沼町 ①長沼町勇獅子舞、富山県氷見市葛葉〔菜かも〕、長沼町 9 区他。
- 新十津川町 ①新十津川獅子神楽：富山県利賀村（現・南砺市）、新十津川町農村環境改善センター。
- 妹背牛町 ①妹背牛町獅子舞、富山県入善町、妹背牛町民会館。
- 秩父別町 ①滝の上獅子：富山県上平村（2015 保存会解散）。
- 雨竜町 ①雨竜町獅子神楽、富山県、雨竜町公民館
- 北竜町 ①真竜獅子舞保存会。種類：郷土芸能。母村の地名：富山県林村・兵庫県淡路島
- 沼田町 別紙（省略）
- 千歳市 ①泉郷獅子舞（舞い、太鼓、囃子）富山県、泉郷地区
- 石狩市 ②望来獅子舞：富山県利賀村（厚田小学校）。
- 厚真町 ①幌内神楽（1910～獅子頭・ほら貝等）：岩手県湯元、厚真町幌内地区、幌内マナビィ。
②ねつ送り（1903～太鼓・撥）：富山県南砺市城端西明、厚真町軽舞地区、軽舞生活会館。
- むかわ町 ①鶴川獅子舞：富山県西砺波郡、本町鶴川地区。
- 森町 ①濁川越中神楽（太鼓・笛）：富山県、森町字濁川
- 旭川市 別紙（省略）
- 士別市 ①瑞穂獅子舞（獅子舞）：富山県、本市朝日地区（瑞穂獅子舞伝習館）。
- 名寄市 ①風連獅子舞（獅子舞）：富山県東砺波郡井波町、風連町字瑞生（下多寄神社）。
- 富良野市 ①富良野獅子舞：富山県砺波市五郎丸、学田地区に始まり市街地や農村部。
②越中伝承山部獅子舞：富山県下新川郡新屋村、山部地区
- 鷹栖町 ①北野神社獅子舞（獅子舞）：富山県旧東野尻村（石川県金沢椿原天満宮の獅子舞に由来）、鷹栖町北野地区。
- 美瑛町 びえい獅子舞保存会：富山県氷見市（旧・久目市）、美瑛神社。
- 中富良野町 別紙（省略）
- 羽幌町 別紙（省略）
- 初山別村 ①「有明獅子舞」：富山県入善町、有明八幡神社境内
- 天塩町 ①越中獅子舞：富山県
- 利尻富士町 ①南浜獅子神楽（風流）：富山県射水市（旧新湊市）、本町鬼脇・南浜地区（鬼脇公民館）。

- 音更町 ①東土狩獅子舞保存会：富山県。
 ②矢部獅子舞保存会：富山県。
- 幕別町 ①糠内獅子舞：富山県、糠内地区。
- 弟子屈町 ①鑑別獅子舞：富山県氷見市にルーツがあると考えられている、弟子屈町鑑別地区（奥春別小学校）。
 ②仁多獅子舞：富山県東砺波郡井波町東町の獅子舞がルーツと考えられている、弟子屈町仁多地区（一度休止しており復活に向けて活動中）。
- 根室市 ①瑛瑤瑠獅子神楽：富山県黒部市・瑛瑤瑠（旧瑛瑤瑠小学校）。
- 浦幌町 ①浦幌開拓獅子舞：富山県（母村）、浦幌町字住吉町（伝承地区）

富山県での収集資料(獅子舞関連)

- 「北海道の越中獅子舞」(佐伯安一『富山民俗の位相』(桂書房,2002))
- 富山県教育委員会編『富山県の民俗芸能-富山県民俗芸能緊急調査報告書-』(2002年3月31日)
- 氷見市立博物館展示解説シート獅子舞1「氷見の獅子」
- 氷見市立博物館展示解説シート獅子舞2-1「氷見の獅子舞の実際～その1～」
- 氷見市立博物館展示解説シート獅子舞2-2「氷見の獅子舞の実際～その2～」
- 氷見市立博物館展示解説シート獅子舞3「カシラ持ちとカヤ人足」
- 氷見市立博物館展示解説シート獅子舞4「太鼓台と囃子方」
- 氷見市立博物館展示解説シート獅子舞5「氷見の獅子舞の演目」
- 氷見市立博物館展示解説シート獅子舞6「箱獅子と龍頭獅子」
- 氷見市立博物館. 特別展「氷見の獅子舞」パンフレット(2012[平成24]年3月1日)
- 氷見市教育委員会『図説 氷見の歴史・民族』(2003[平成15]年3月1日)
- 砺波市『砺波市史』資料編5・集落(1996年3月25日)
- 砺波市史編纂委員会『砺波市史』(1965.3.20)
- 西嶋栄夫『江波神社小誌』(砺波市立図書館所蔵,1985年1月)
- 砺波市立砺波郷土資料館『砺波にルーツを持つ人々～砺波から北海道へ～(展示図録)』(2016年)